

記録のスキーマと情報のスキーマを用いた個人の知識構造の研究

Study of the Personal Knowledge Structure

Using the Document Schema and the Information Schema

学籍番号：201321658

氏名：横井 まなみ

Manami YOKOI

人は何かを知ろうとするとき、図書や雑誌、Web ページなどの「記録」に接する。記録から「情報」を認識し、情報を「知識」とすることで、知るという行動は達成される。本研究では人の知るという行動を明らかにするために、記録から情報を認識する過程を「記録の情報化」、情報を知識として形成する過程を「情報の知識化」と定義した。そして、二つの過程から個人の知る行動の基盤となる知識構造を明らかにするために、「スキーマ」という概念を用いた。スキーマとは、物事を捉えるときに作用する枠組みである。具体的には、個人がもっている既存の知識の構造と、情報を認識する際に参照される枠組みがスキーマであると考えられる。

本研究では、スキーマの概念を踏まえたうえで、著者によって作成された記録の知識構造を「記録のスキーマ」、記録から情報を認識する個人のもつスキーマを「情報のスキーマ」と定義し、それぞれのスキーマを生成、比較することで個人の知識構造を明らかにしようと試みた。具体的には、図書の索引が本文のどの箇所に付与されているのかを調査し、その分布を図にすることで記録のスキーマを生成した。一方、情報のスキーマは個人として定義した大学生、大学院生に図書の本文から重要だと感じた語句を抽出させ、章節ごとの分布を図にすることでスキーマを生成した。記録のスキーマと情報のスキーマを比較することで、記録の情報化の際には、記録のスキーマと同一のスキーマを描くことができるかを検証した。また、情報のスキーマ同士を比較することで、記録の情報化、情報の知識化に個人差が生じるのかを検証した。

検証の結果、記録のスキーマと情報のスキーマはまったく同一になるという結果は得られなかった。しかしながら、個人の背景として定義した学問を専修した期間と関心をもつ領域の視点に立って分析を行った結果、学問を学んだ期間や関心領域によって、抽出されやすい語句や語句が抽出されやすい章節が存在することがわかった。また、情報のスキーマ同士の比較でも、専修年数と関心領域が、スキーマの生成、結果的には知識の形成に影響を与えていることがわかった。このことから、人が記録から情報を認識するときと、情報を知識として形成するときには、背景の存在が影響を与えていることが考えられる。したがって、知識構造の形成には個人の持っている背景が大きな役割を果たしていることが考えられる。本研究を踏まえた課題としては、今回定義した二つの背景がどのように関連して背景として機能しているのか、また、知る行動を経て背景が明らかに変化するのはどのようなときかを検証する必要があるといえる。

研究指導教員：緑川 信之

副研究指導教員：横山 幹子